

2024(令和6)年度 第1回
尾瀬・日光国立公園ニホンジカ対策広域協議会
議事概要

日時：令和6年10月17日(木) 9:30～11:30

場所：ウェブ会議システム「Webex」

対面会場「貸会議室6F」

■議事進行：関東地方環境事務所 中島次長

■事務局挨拶：関東地方環境事務所 中島次長

2020年1月に策定した尾瀬・日光国立公園ニホンジカ対策方針に沿って関係機関が連携し対策を実施している。策定から5年が経過することから、本協議会では対策方針改定に関して活発な議論をしたい。

■議事

(1) 2020年～2024年対策実施結果について

<資料1を基に事務局(環境省)より説明>

○大森主幹

ここ1～2年は、現場の状況に応じて順応的に対応できていると感じる。田代山のシカの季節移動先が日光であったことや、夏頃から秋にかけて自動撮影カメラの撮影頻度が下がることなどは重要な発見。ただし、舟岐林道～田代山にかけてはシカの食害によって非常に危機的な状況であり引き続き注視が必要と感じる。また、ここ数年、尾瀬地域での捕獲頭数は増えているが生息密度は高止まり傾向にある一方、対象区域全体でみると減少傾向にあり対策の効果があるように見える。この点については、なぜそのような状況にあるのか分析が必要と感じる。

○奥田教授

近年の積雪量の減少に伴い、今後越冬地が分散化していく可能性がある中で、分布拡大地域である田代山のシカのGPS首輪個体のデータは、今後の対策において非常に重要な情報になるだろう。田代山と鬼怒沼のGPS首輪個体の性別はどちらか？

⇒(福島県)田代山の個体はメスである。

⇒(環境省)鬼怒沼の個体は1歳程度のメスである。

○谷本名誉教授

田代山、鬼怒沼ともに30年前からシカが侵入している。現場を目で見た際の感覚と、手元にあるデータとのギャップについても掘り下げて分析することを心がけてほしい。

(2) 尾瀬・日光国立公園ニホンジカ対策方針の改訂について

<資料2を基に事務局(環境省、請負者：野生動物保護管理事務所)より説明>

【保全対象・対象区域】

○群馬県

別途意見照会時の対策方針骨子案では、尾瀬ヶ原・尾瀬沼が最も重要な地域であることを明記する方向で話が進んでいた。今回の資料には記載がないか、方向性は同じか？

⇒（環境省）p.7 の「尾瀬ヶ原・尾瀬沼等の湿原を中心に」という文言の通り、方向性には変わりはない。保全対象の部分では大きな視点での書きぶりとなっており、実施方針の部分で細かく記載する予定。

○谷本名誉教授

「戦場ヶ原を対象区域外とする」とあるが、日光国立公園戦場ヶ原シカ侵入防止柵モニタリング検討会とタイアップして対策を進めていく必要があるため、書きぶりには注意が必要。

⇒（環境省）戦場ヶ原に関わる検討会等と連携や情報共有を図りつつ進める旨、対策方針に記載することを検討する。

⇒（谷本名誉教授）言葉が独り歩きする危険性があるため、次期対策方針には明確に示してほしい。

⇒（奥田教授）データ数が少なく信頼性が低い既存の情報を補完する上でも、戦場ヶ原のデータを使える可能性があるだろう。広域的な管理のためには、対象外とするのではなく、「連携を図る」「情報共有する」といったポジティブな書き方が望ましい。

○関東森林管理局

複数の協議会について、主催や内容について整理された一覧があると良い。

⇒（環境省）意見を取り入れさせていただく。

○奥田教授

近年の積雪量減少により、今後シカの分布域は変化していくだろう。今回の対象区域以外からもシカが移入してくる可能性を考慮しながら、対象範囲を検討する必要がある。また、分布拡大地の個体がどこから来ているのか、情報を収集し、集約する役割を協議会で担ってもらいたい。

⇒（環境省）5 カ年計画ではあるが、GPS 首輪個体のデータ等を参考にしながら変えるべきところは順応的に変えながら進めていきたい。

【目標】

○環境省

森林の目標値の設定に関して、意思を確認したい。

⇒（栃木県）設定に特段異論はない。目標を達成するための捕獲強化は協議会として検討しているか？

⇒（環境省）今後の対策の実施については、第2回協議会で議論していきたい。

⇒（関東森林管理局）個人的には問題ないと考えているが、他の課とも共有し検討した上で回答したい。

○大森主幹

森林植生、湿原植生ともに、狭い範囲での小規模なスケールの植生がモザイク状になっている特徴があることから、どの場所のデータを代表値として使用するのかは吟味する必要がある。データを取得する場所は、次回の目標設定のために順応的に更新または追加していく

と良い。また、チシマザサに対するシカの影響とミヤコザサに対するシカの影響は異なるが、尾瀬のような多雪地域（チシマザサが優占）では栃木県のミヤコザサを想定している SDR において被害の過小評価が危惧される。設定する数値目標については適用できるサイトと適用できないサイトで仕分けた方が良い。目標値は参考値として扱い、対策方針には明記しないか、または参考資料に記載するということも含めて検討してほしい。

⇒（環境省）数値目標として検討している定点調査の被害株数の割合についても、適用できるサイトと適用できないサイトがある、ということか？

⇒（大森主幹）その通り。植生タイプにより食害程度は変わってくるため、設定する指標がその場所に適切かどうかの検証は必要。

⇒（環境省）今後、管理に基づいた対策を進めるために、まずは何等かの指標値を出したいという考えがある。ただし、暫定的なものとして整理し、今後も順応的に改訂していきたいと考えている。

⇒（奥田教授）まずはデータをとってみて、時系列的にどのように変化していくのか確認し、場所による違いを考慮しながら解析する、というところからスタートしてみることが重要。

○奥田教授

対象区域や、数値目標を打ち出せたことが本協議会の大きな成果。まずは、対策が順調に進んでいるのかを、今回設定する数値目標を使って確認・把握する。数値目標は固定する必要はなく、順応的に変えて良いものと考えてる。

○谷本名誉教授

シカの影響が出る場所は、地形や光環境等により多様であることから、単純に下層植生にフォーカスするのではなく、その場所の特徴も把握してほしい。

○大森主幹

シカの被害が多い場所であれば忌避性の種（シロヨメナやマルバダケブキ）や攪乱地を特徴づける種（ハクサンスゲやホソバオゼヌマスゲ）などがモニタリング上重要な種となる。目標設定に組み込むというより、モニタリング実施方針に関する部分になるが、検討してほしい。

○奥田教授

SDR はシカによるこれまでの影響・履歴を表しているものであり、短期的なシカによる影響に対応しているわけではないことから、このタイミングでスタートし、データを収集していく必要がある。シカの影響によりすでに森林構造が変化してしまっているところは、SDR のランクは高くなる。このような場所をどのように解釈するのも含めて考えていく必要がある。栃木県での調査頻度はどのようか。

⇒（栃木県）SDR 調査は数年に一度実施するため、次の改訂までに実施することを明言はできない。

○谷本名誉教授

森林に関しての目標の設定方法はこれまでになかった進歩した形だと思う。なぜ森林が衰退しているのか、それをどのような目的で、どのような方法で回復させるのかビジョンをは

つきりさせる必要がある。データに加え、現場での周辺の観察も大切であることを次期対策方針へ加えてほしい。

○群馬県

ライトセンサスや糞塊密度調査など様々な調査手法があるが、それぞれの値を換算することはできるのか？

⇒（野生動物保護管理事務所）複数の調査手法について、それぞれの相関関係はある程度分析できるが、違う挙動を示すことはある。今回は4県とも確実にデータを収集しており、広域的な密度指標とされる目撃効率を使用して解析を行った。糞塊密度調査は実施場所が限られていることから、解析には使用しなかった。湿原ではライトセンサスが最も実施年数が長くデータセットが揃っていたことから、相関関係の分析に使用した。別の調査手法データに切り替えていく場合には、既存の調査手法と相関があることを確かめる作業が必要だろう。

⇒（奥田教授）信頼性の高い換算は難しい。それぞれの地域でこれまで実施されてきたモニタリング手法は変えずに、時系列的に情報を追っていくことが最も信頼性が高い変動を確認できるだろう。新たな手法が必要となった場合には、コストパフォーマンスを加味しながら、各機関それぞれがモニタリングするべきものを考えることが重要。

【第2回協議会で扱う項目について】

○大森主幹

モニタリングが、目標設定に役立つ形で実施されることが重要。植生保護の実施方針については防護柵の設置が現実的なのかという視点、また、様々な機関や地域で取り組んでいる調査研究が情報共有できるような機会の設定についても盛り込んでほしい。

○奥田教授

様々な地域で様々な調査手法が採用されているが、今回設定する目標に沿って現実的な評価が可能かどうかをこれから確認していくことになることから、この時期の取り組みが重要と考えている。

○谷本名誉教授

最終的には植生が回復可能な範囲でシカも含めて共存できるような形になると良い。データから様々な見方を検討し、少しでも良い方向に進むような形で成果が出ることを願っている。